The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日本語の否定対極表現とアクセント(Ⅱ)：最小表現の数詞“１”を含む名詞句に助詞“も”が後接する場合
Author(s)	三宅，知宏
Citation	現代日本語研究. 2022, 14, p. 1-14
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/92771
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日本語の否定対極表現とアクセント（Ⅱ）

―最小表現の数詞“1”を含む名詞句に助詞“も”が後接する場合―

Negative Polarity Items and Accent in Japanese (II):

A Focus on the Particle *mo* that co-occurs with the Nouns Having Cardinal Number One

三宅　知宏

MIYAKE Tomohiro

キーワード：否定対極表現，アクセント，助詞“も”，数詞“１”，否定

要　旨

本稿の目的は，助詞“も”を伴った形式が，「否定対極表現（NPI）」としての性質を持つ場合における，文法とアクセントとの関係について考察することにある。本稿と同じ目的を共有する前稿（三宅(2022)）においては，「不定語」に“も”が後接する場合に焦点が当てられたが，本稿では「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に“も”が後接する場合が中心的な考察の対象となる。

例えば「客は，一人も，来なかった（*来た）」のような例における傍線部の表現は，否定対極表現として働き，同時に，本来とは異なるアクセント型になっているが，本稿は，このような現象を詳細に分析した上で，結論として，以下のような一般化を導く。

「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は，「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI）」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。

さらにこの一般化を，前稿における一般化と統合することを試みる。

１．はじめに

本稿は，前稿（三宅(2022)）とともに，助詞“も”の後接により生産的に形成された形式が，「否定対極表現」としての性質を持つ場合における，文法とア

クセントとの関係について考察することを目的とする研究の一端をなすものである。

次例を見られたい。なお，以下，本稿におけるアクセントの表示は，当該の語をひらがな表記した上で［ ］でくくり，アクセント核を「＼」の符号で示す。いわゆる「平板型」は語末に「￣」の符号をつけることで示す[1)]。

(1) そこにあるものは なにも 食べなかった / *食べた

(2) “なにも”［なにも￣］［*な＼にも］　（“なに”［な＼に］）

上の(1)のように不定語“なに”に“も”が後接した“なにも”という形式は，(1)のような文においては，必ず否定述語を伴わなければならず，いわゆる「否定対極表現」としての性質を持っていると言える[2)]。その際，興味深いのは，(2)で示したように，“なにも”における“なに”が本来持つアクセント型とは異なり，平板型で発音されるということである。

このような現象は，次例のように，不定語の場合だけでなく，「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に“も”が後接した場合にも観察できる。

(3) その店に客は 一人も 来なかった / *来た

(4) その店に客は 二人も（三人も / 10 人も / …）来なかった / OK 来た

(5) “一人も”［ひとりも￣］［*ひと＼りも］　（“一人”［ひと＼り］）

(6) “二人も”［*ふたりも￣］［ふた＼りも］　（“二人”［ふた＼り］）

上の(3)のように，“一人も”は，否定対極表現としての性質を持つと同時に，本来のアクセント型ではなく，平板型になっている（(5)を参照）。しかし(4)のように，“１”以外の数詞の場合はこのような現象は見られない（(6)を参照）。

前稿（三宅(2022)）及び本稿は，このような現象について考察し，実証可能で，有意義な一般化を導くことを試みる，一連の研究をなすものである。

前稿では「不定語」の場合に限定した考察を行ったが，本稿においては，「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」の場合に関して，考察する。

さらに，本稿において導かれる一般化を，前稿における一般化と統合することも目的に加えられる。

結果として，本研究（前稿及び本稿）は，「文法（形態論，統語論）」と「音韻論」のそれぞれの研究成果を融合させることの有効性を示すことになる。

本稿は次のような構成をとる。次の２.において，前稿（三宅(2022)）の概要を確認するとともに，先行研究と問題の所在を明確にする。３.において，「最小表現の数詞“1”を含む名詞句」の場合について，仮説を立て，それを検証するという方法で一般化を導く。４.において，前稿との統合を図り，５.において，本研究（前稿と本稿）で考察の対象としなかった表現について言及し，６.において，まとめを行う。

２．前稿（三宅(2022)）の概要

２．１．先行研究と問題の所在

本研究（前稿（三宅(2022)）及び本稿）で考察する現象に関する先行研究と，それらの論考の後も残されている問題について，前稿において述べられていることの概略を以下に記す。詳細は前稿を参照されたい。

本研究で考察される現象について言及されているものには次のようなものがある。

(7)a.　「アクセント」の観点

　　秋永（編）(2001)，NHK 放送文化研究所（編）(1998)，前田(2008)

b.　「不定語」(「疑問語」) の観点

　　尾上(1983)，益岡・田窪(1992)

c.　「助詞“も”」の観点

　　寺村(1991)，沼田(1986)

d.　「否定」の観点

　　吉村(1999)，工藤(2000)

e.「否定対極表現」とアクセントとの関係の観点

　　郡司(2006)，中西(2010)

(7a)の「アクセント」に関する辞書，論考においては，現象の個別の指摘はなされているが，否定対極表現とアクセントに関する一般化は図られていない[3)]。(7b～d)の「文法」に関する論考においては，助詞“も”を伴う否定対極表現の形式としての記述はなされているが，アクセントに関する指摘はない。(7e)に挙げる僅かな研究のみが否定対極表現とアクセントとの関係について言及しているが，助詞“も”を伴う否定対極表現の形式，及びアクセントの平板化という

現象に関する詳細な記述には至っていない。

先行研究では,「不定語」及び「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接し，否定対極表現としての性質を持つ場合における，文法とアクセントとの関係についての総合的,かつ詳細な記述はなされていないと言える。

このような先行研究において十分ではないと思われる記述を，新たに試みようとするところに本研究の独自性がある。

２．２.「不定語」に助詞“も”が後接する場合

前稿では,「不定語」に助詞“も”が後接する場合に焦点を当てて，考察を行ったが，以下にその概略を記し，本稿においても論旨を継承する。なお，以下では,「否定対極表現（Negative Polarity Items)」を「NPI」と略称する。

まず,“だれも”“いつも”のように助詞“も”を後接した場合の「不定語」は，次のような３種に分類される。

(8) 助詞“も”を後接した場合の「不定語」の分類

Ａ類：“だれ”“なに”：常に NPI になる（ただし特定の構文を除く）

Ｂ類：“どこ”“どれ”：NPI になる場合とならない場合がある

Ｃ類：“いつ”　　：常に NPI にはならない

この分類を前提とすると，次のような仮説が立てられる。

(9) **仮説①：**

「不定語」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は,「否定対極表現（NPI)」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。

前稿では，この仮説が規則として成立するかどうかについて，用例を詳細に検証した。例えば，次のような例を見られたい。

(10) a.　［だれも￣］いなかった / *いた

b.　［*だ＼れも］いなかった / いた

(11) a.　［なにも￣］なかった / *あった

b.　［*な＼にも］なかった / あった

上の(10)(11)の対比を見れば分かるとおり，これらは“も”が後接した場合，NPI としての機能を持つと同時に，アクセントが平板に必ずなる[4)]。まさに(9)

の仮説に従っている。

(12) a.　［*いつも￣］いなかった / いた

b.　［い＼つも］いなかった / いた

“いつ”は，“だれ”及び“なに”とは異なり，そもそも平板型のアクセントをとらない。そして NPI としての性質も持っていない。それではどのような意味を表しているかと言うと，全ての場合に，述語によって表される事態が成立するという，いわゆる「全称量化」である。

前述の(9)の仮説は，NPI の場合にのみ平板型になる旨を述べているのであり，NPI でもなく，そして平板型でもない“いつも”は，(9)には違反していない。

(13) a.　［どこも￣］行かなかった / *行った

b.　［どこも￣］悪くない / *悪い

上例のような平板型アクセントの“どこも”は，述語に否定を要求することから，NPI としての性質を持っている。これだけなら(9)の仮説通りなのだが，しかし“どこ”は，“も”を後接しても平板型にならず，通常のアクセントのままという例が存在する。次のようなものである。

(14) 連休中のホテルは　［*どこも￣］ / ［ど＼こも］　満室だ

(15) クリスマスの洋菓子店は　［*どこも￣］ / ［ど＼こも］　大賑わいだ

(16) 駅のホームは　［*どこも￣］ / ［ど＼こも］　禁煙になっている

注意すべきは，これらの平板型をとらない“どこも”は，NPI としての性質を持っていないということである。一見，(9)と相容れないようで実は，NPI の場合は必ず平板型アクセント，そうでない場合は必ず通常のアクセント，というように規則的であり，(9)の通りなのである。

前稿では，さらに観察の範囲を広げて，(9)の仮説に照らして問題になりそうな事例を 4 点にわたって検証し，やはり(9)の仮説が成り立つことを確認した。次のⅰ.からⅳ.の 4 点である。

ⅰ.“だれも”に“が”が後接し“だれもが”となった場合　(例は(17))

ⅱ.“だれもかれも”“なにもかも”“どこもかしこも”という形式となった場合　(例は(18))

ⅲ.“なにも”が持つ特殊な構文の場合　(例は(19))

ⅳ.“～もなにも”という形式が持つ特殊な構文の場合　(例は(20))

(17) a. だれもが来なかった　　b. だれもが来た

(18) a. だれもかれもそれを欲しがった。

b. 災害でなにもかも失った

c. どこもかしこも人でいっぱいだ。

(19) a. なにも，そんなに厳しく言うことないでしょ。

b. なにも，私は君が憎いから言っているわけではない。

(20) a. 自分のプライドもなにもかなぐり捨てた。

b.「この企画案,知ってる？」「知ってるもなにも,私が立てた案だよ。」

ここで詳細を再掲する余裕はないので，全くの概略にとどめるが，これらも全て前述の(9)の仮説に矛盾しないことが，前稿では示されている。

ただし，ⅲ.の場合を分析するために，(9)の仮説は，次のように修正されている。この現象における「否定」は「全部否定」でなければならないという旨の修正である[5)]。

(21) **仮説②：**

「不定語」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は,「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI)」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。

前稿では，様々な事例に基づく検証の結果，最終的に上の仮説が正しいことが主張され，助詞“も”を伴う NPI とアクセントとの関係に関する一般化として成り立つことが示された。

３．仮説とその検証 —最小表現の数詞“１”を含む名詞句の場合—

３．１．仮説

本節よりいよいよ,本稿の課題である「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接する場合について，考察を行う。

考察にあたっては，前節で確認した前稿における一般化を継承した仮説を立て，それを検証するという方策をとる。

(22) **仮説③：**

「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は,「全部否定」の意味を表す「否定対極

表現（NPI)」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。

上の仮説は，(21)の一般化における「不定語」を「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に置き換えただけのものである。

ここで言う「最小表現の数詞“１”」とは，数詞“１”が単位としてこれ以上，分割できない最小数を表す場合のことを指す[6)]。例えば，“１人”“１つ”などはこれにあたるが，“１時間”“１年”などはさらに単位として分割できるため，これにはあたらない。

なお，「最小表現」ではない「数詞“１”」については，次の３.２で検証する。また，便宜上，これ以降「最小表現の数詞“１”」を「最小１」と略称することがある。

次例を見られたい。

(23) a.　［ひとりも￣］いなかった / *いた

b.　［*ひと＼りも］いなかった / いた

(24) a.　［ひとつも￣］なかった / *あった

b.　［*ひと＼つも］なかった / あった

“１人”“１つ”の本来のアクセントは，［ひと＼り］［ひと＼つ］なので，上例は，“も”の後接により，アクセントが平板化し，そして NPI としての性質を持つことになっていることから，まさに(22)の仮説通りであると言える。

３．２．検証１（分割可能な（最小ではない）“１”の場合）

それでは，数詞“１”であっても，「最小１」ではない，換言すると，単位としてさらに分割できるものについてはどうであろうか。次例を見られたい。

(25) a.　１時間も / １年も待った　　b.　１時間も / １年も待たなかった

(26) a.　彼は１キロも走った　　b.　彼は１キロも走らなかった

(27) a.　水を１リットルも飲んだ　　b.　水を１リットルも飲まなかった

上のような“１時間”“１年”“１キロ”“１リットル”などは全て，さらに分割できることから「最小１」とは言えない。そして重要なのは，それを含む名詞句が NPI になっておらず，さらに，アクセントも平板型ではないということである。これは(22)の仮説に矛盾しない。

なお，この場合の“１時間も”等の形式がどのような意味を持っているかについては，本稿の関心の外にあるため，詳細を述べることは避けるが，“１”であっても，分割可能な（最小ではない）場合は，一般的な「数量」に後接する場合の“も”の意味と同じとみてよい。即ち，述語が肯定の場合，当該の「数量」を「多い」と話し手がみなしていることが表されるということである。

ただし，従来の研究で言われている通り，述語が否定の場合は，「数量」に後接する“も”は多義になる（沼田(1986)，寺村(1991)等を参照)。例えば，次例は，Ａ，Ｂとして示すような二つの意味に解釈可能である。

(28) １時間もしゃべらなかった

Ａ：しゃべらない時間が１時間あり，それを長いと感じている

Ｂ：しゃべった時間は１時間よりも短い

注意すべきは，Ｂの場合は，NPI と言えなくもないということである[7)]。しかしながら，そうであっても，この場合の「否定」は「全部否定」の意味にはならないので，(22)の仮説には反しない。

３．３．検証２（分割可能かどうかが文脈によって決まる場合）

ここでは多少，複雑だが，“１”が分割可能かどうか（「最小１」かどうか）が文脈によって決まる場合について検証する。

例えば，“１個”は，次例のように「パチンコ玉」であれば，通常，分割不可能とみなされる。即ち，この場合は「最小１」ということになる。

(29) 箱の中のパチンコ玉を１個も無駄にしなかった

（[いっこも￣] / [*い＼っこも]）

(30) *箱の中のパチンコ玉を１個も無駄にした

（[いっこも￣] / [い＼っこも] のいずれの型でも非文法的）

NPI になると同時に，アクセントも平板型になっていることから，(22)の仮説が予測する通りである。

一方，「スイカ」であれば，切り分けられることが通常なので，この場合の“１個”は，分割可能と把握できないわけではない。そのような把握ができる話者にとっては，“１個”は「最小１」ではないということになる。その点をふまえて，次例を検討してみよう。述語は肯定なので，当該の数量を「多い」とみ

なす解釈となる（前述の(28)Ａを参照）。

(31) スイカを１個も食べた

まず，この例の容認性には話者によってゆれがあり，完全に文法的とは言えないことを認めなければならない。実際，次の(32)のような「２」以上の場合，(33)のような「１」未満の場合と比べると，明らかに差があることが分かる。(32)(33)は，当該の数量を「多い」とみなす解釈として，容認性に問題はなく，文法的である。

(32) スイカを ｛２個も / 10 個も / …｝食べた

(33) スイカを ｛半分も / 四分の一切れも / …｝食べた

さて，(31)の検討に戻ると，これが文法的と判断される場合，アクセントは必ず［い＼っこも］でなければならず，平板型ではないことが分かる。また，そもそも NPI でもない。したがって，(22)の仮説に反してはいない。

このような“１個”のように，共起する要素も含む，広い意味での文脈によって，「最小１」と解釈される場合のものもあることが分かるが，そのような場合でも，(22)の仮説とは矛盾しないのである。

３．４．検証３ （“～の１αも”の特殊構文）

次例を見られたい。

(34) 彼が成功した理由の一つもそこにある

(35) 線審の一人も同じ判断を下した。

これらは，“理由の一つ”“線審の一人”に“も”が後接していると解釈される。次の(36)(37)のような助詞“が”“は”の位置に“も”が生起したものと考えればよく，一般的な用法の“も”と言ってよい。

(36) 理由の一つ｛が / は｝そこにある

(37) 線審の一人｛が / は｝違う判断を下した。

本稿の前節までで観察してきた，「数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接して，特別な文法的性質（NPI）や特別な音韻的性質（平板型アクセント）を持つようになった形式とは異なるものである。純粋に構成的な「句」と言い換えることもできる。

少なくとも，このような場合は，NPI ではなく，また平板型アクセントでも

ないため，(22)の仮説に反することはない。

さらに次のような例も見られたい。これらは，(34)(35)と同様に“～の１αも”（“α”は助数詞あるいは助数詞に準じるもの）という形態をとっているが，表す意味については異なっている。

(38) a. 文句の一つも言わずに働いた。

b. あいつには文句の一つも言ってやりたい。

(39) a. 緊急時なのに電話の一本もなかった。

b. 緊急時は電話の一本も下さい。

(40) a. ハガキの一枚もよこしてこない。

b. ハガキの一枚もよこしなさい。

これらは，“～の１α も”という形態はとっていても，各要素の意味の総和からは得られない特定の意味を表している。この場合の“～の１α も”はこれ全体で特定の意味と対応する「まとまり」，いわゆる「構文」とみなすことができる[8)]。

それではどのような意味を表しているかというと，概ね，(38)(39)(40)の a. は助詞の“さえ”と，同じく b. は助詞の“くらい”に近い意味と言える。

(38') a. 文句さえ言わずに働いた

b. あいつには文句くらい言ってやりたい

意味に異なりはあると言っても，“１α”は「最小１」であり，いずれも最小限度を示す点では共通性も見られる。この「構文」の持つ意味の詳細な分析については，興味深い点が多いが，本稿の範囲を超えるため，別稿を期すこととしたい。

なお，次例のように，a. の“さえ”に近い意味の場合のみ，“の”及び“も”を省略すること（“～１α”の形にすること）が可能であるため，a. と b. はそもそも異なった「構文」とみなすべきものかもしれないが，そのような点についても別稿に委ねたい。

(38") a. 文句一つ言わずに働いた。

b. *あいつには文句一つ言ってやりたい。

さて，本稿の議論に戻ろう。

この「構文」における“１α も”のアクセントは平板型ではない。そして，

NPI かどうかについて言えば，b. の“くらい”の意味の場合は NPI ではないことが明らかだが，a. の“さえ”の場合は NPI と言えなくもない。ただし，その場合でも「全部否定」ではない。

したがって，この構文の場合であっても，(22)の仮説には矛盾しない。

３．５．この節のまとめ

検証の結果，前述の「(22) 仮説③」は正しいものと認め，本稿における一般化として，次に再掲する。

(41)「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は，「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI)」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。

４．前稿における一般化との統合

前稿における一般化と本稿におけるそれは，次のように，一つに統合することが可能である。

(42)「不定語」及び「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は，「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI)」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。

これを，前稿と本稿をまとめた本研究における一般化とする。

５．その他の場合

補説として，「不定語」及び「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」以外の語句に，助詞“も”が後接して，類似の性質を持つ場合について，ふれておく。

(43) “少し”［すこ＼し］，“少しも”［すこしも￣］

(44) 出された御馳走を［すこしも￣］ 残さなかった / *残した

上例のような“少しも”という語句は，タイプとしては取り出せず，あくまで個別の語句ということになるが，(42)の一般化に適合させることは可能性としてはある。“も”の後接により，アクセントが平板化し，NPI としての性質

を得ているためである。

しかしながら，“も”が後接しているとみられる NPI の形式で，「不定語」及び「最小１」以外の，タイプとして取り出せない場合のものには，次のようなものがあるが，これらについては，(42)の一般化に適合させることは難しいように思われる。

(45)“これっぽっちも”“いささかも”“みじんも”“つゆほども”“ちりほども”…　　（工藤(2000)：105 の例を参照）[9)]

前述の“少しも”も含めて，“も”の前接要素が「不定語」「最小１」以外の場合は，タイプとして取り出せないため，個別に記述するものとし，本研究の一般化の適用外とするのが妥当と考える。

６．おわりに

６．１．本稿の結論

本稿では，「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に，助詞“も”が後接することにより生産的に形成された形式が，「否定対極表現」としての性質を持つ場合における，意味とアクセントとの関係について考察を行い，以下のような一般化が成り立つことが示された。

(46)「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は，「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI)」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。　　((41)の再掲)

さらに，これを，次のように，前稿における一般化と一つに統合した。

(47)「不定語」及び「最小表現の数詞“１”を含む名詞句」に助詞“も”が後接することにより，生産的に形成された形式は，「全部否定」の意味を表す「否定対極表現（NPI)」としての性質を持つとき，そしてそのときに限り，平板型アクセントになる。　　((42)の再掲)

この一般化をもって，本研究（前稿及び本稿）の結論とする。

６．２．残されている課題

本研究において，残されている課題として，「不定語」と「最小１」の共通性

とは何か，また，これらと“も”を組み合わせ，「平板化アクセント」にすることでなぜ NPI になるのか，さらに，このような現象の基盤になる“も”の本質的な意味とはどのようなものか，等について考えることが挙げられる。

今後，本研究の発展として，これらの課題に取り組むこととしたい。

注

1）次のような例を参照されたい。

“命”［い＼のち］，“卵”［たま＼ご］，“男”［おとこ＼］，“鼠”［ねずみ￣］

2）次例のように，類似の意味を持つ“全て”，“全部”，“みんな”等は，肯定述語でも問題なく，否定対極表現ではない。

そこにあるものは 全て 食べなかった / 食べた

3）アクセントに関する研究において，一般化が図られていなかった理由については，前稿を参照されたい。

4）“だれ”“なに”の本来のアクセントは［だ＼れ］［な＼に］であり，助詞の後接は通常，アクセントの変更を伴わないので，この現象は「平板化」とみなしてよいであろう。また次例のように並列されていても同様である。

その場では，だれもなにも言わなかった。（［だれも￣］［なにも￣］）

5）「全部否定」については寺村(1991)，益岡・田窪(1992)等を参照。なお，工藤(2000)では「完全否定」，沼田(1986)では「全面否定」と呼ばれているが内実は同じである。

6）寺村(1991)で，「分割不可能な１」と呼ばれているものに等しい。

7）A の意味は肯定述語であっても可能であるが，B の意味は肯定述語では不可能（否定述語でなければならない）ためである。

8）「構文」についての詳細は，三宅(2011)を参照されたい。

9）“ちっとも”という語句は，NPI ではあるものの，“ちっと”の部分が独立できず，“ちっと＋も”とはみなせないため，“も”の後接により生産的に形成される形式ではないと言える。

参考文献

秋永一枝（編）(2001)『新明解日本語アクセント辞典』三省堂

NHK 放送文化研究所（編）(1998)『新版 NHK 日本語発音アクセント辞典』日本放送協会

工藤真由美(2000)「否定の表現」『時・否定と取り立て』岩波書店

郡司隆男(2006)「日本語の NPI の韻律と意味」『Theoretical and Applied Linguistics at Kobe Shoin』9

寺村秀夫(1991)『日本語のシンタクスと意味Ⅲ』くろしお出版

中西公子(2010)「数詞とりたての『も』と否定」加藤泰彦・吉村あき子・今仁生美（編）『否定と言語理論』開拓社

沼田善子(1986)「とりたて詞」『いわゆる日本語助詞の研究』凡人社

益岡隆志・田窪行則(1992)『基礎日本語—改訂版—』くろしお出版

前田広幸(2008)「『～モ』のアクセントをめぐって 現代共通語・京都語・倉敷語および平家正節データを対照して」児玉一宏・小山哲春（編）『言葉と認知のメカニズム』ひつじ書房

三宅知宏(2011)『日本語研究のインターフェイス』くろしお出版

三宅知宏(2022)「日本語の否定対極表現とアクセント（Ⅰ）—「不定語」に助詞“も”が後接する場合—」『待兼山論叢 日本学篇』26.大阪大学文学会（大阪大学大学院人文学研究科）

吉村あき子(1999)『否定極性現象』英宝社

（人文学研究科教授）